

中国・新疆ウイグル族の家庭生活とジェンダー —平成13(2001)年度 南疆フィールド調査—

Family Life and Gender of Uygur People in Xinjian, China
: Field-work in Southern Xinjian in 2001

服部 範子* 宮坂 靖子**
Noriko HATTORI Yasuko MIYASAKA

Uygur people is one of minorities who are Muslim in China. Most of them live in Xinjian Uygur self-government ward that is located in the end of northwest, and is the largest one in the country.

Chinese people have been increased recently, and the industrial and economical structure has been changing in this area. Minority people are in part treated well in Chinese society. Those changes have influenced on their folk custom and traditional way of daily living.

This paper is based on the field work in Southern Xinjian that was implemented in August, 2001. This research is planed as the 3-year-project, but this report is the one of the second year. The place we researched is in rural area, and main economy is very traditional, such as carpet weaving, silk craft work, and folk music instruments. So people still continue to live every day life traditionally more than in other areas. Religious customs and habits still remained, but seems to be fading out gradually.

The focus of this paper is on family and social relations of Uygur people in gender perspectives.

In the Islamic traditional society, it is usually believed that the public space is for the man, the private space is for the woman. But Chinese social policy to treat men and women equally gradually influenced the people's everyday life. Women don't necessarily cover their faces and bodies with veil, and can go to the market and work outside recently. But most of them continue to get married in the same villagers or relatives. They maintain to have close relationships with their own relatives and communicate each other very frequently after marriage.

The demographic characteristics are as follows.

In the case of senior people, most women married mainly in 10's, but the age of men's marriage is varied case by case. The age difference between husbands and wives is usually very large. And they have about 5 children in average.

One Child Policy gradually influenced on their family life. Young people are married in early 20's, and have one or two children recently.

As for the education, some people over 60's did not attend the school at all. But people are at least educated at the secondary school level today. Although boys and girls study in the same class in formal education, they spend their family life differently by their sex after school and during holidays. Many parents expect their children to go to university, if possible.

キーワード：ウイグル族 中国・新疆 フィールドワーク イスラム教徒 ジェンダー

Key words : Uygur people Xinjian, China field-work muslim gender

1. 南疆のウイグル族について

新疆ウイグル自治区は、中国の最北西端に位置し、中国の区のうち一番大きい面積を占めている。経済的、産業的には中国の中でも発展の遅れた地域である。

中国には56民族いるが、そのうち漢民族が9割を占め、約1割を占める55民族は少数民族と呼ばれている。この自治区にはウイグル族、ハサク族など少数民族の方が多く居住している。しかし、1950年代以降、漢民族のこの地への流入が政策的に推進されてきたため、近年、漢民族は急増している。現在、漢民族は新疆のうち都市部に

多く居住している。新疆ウイグル自治区を北新疆と南新疆に分けると、漢民族は地域的には北新疆に多いが、南新疆への流入は少ないとのことである(若林 1996)。

本研究の調査対象は、この自治区の少数民族のうちでも最も多いウイグル族である。調査地は南新疆(南疆)の喀什(カシュガル)と和田(ホータン)で、タクラマカン砂漠・タリム盆地、崑崙山脈に挟まれたオアシス都市である。

全疆にウイグル族の占める人口は、〔表1〕に示す通り、46.09%である。ウルムチ市においてウイグル族の

* 兵庫教育大学第5部(生活健康系教育講座) ** 奈良女子大学(生活環境学部)

平成14年10月21日受理

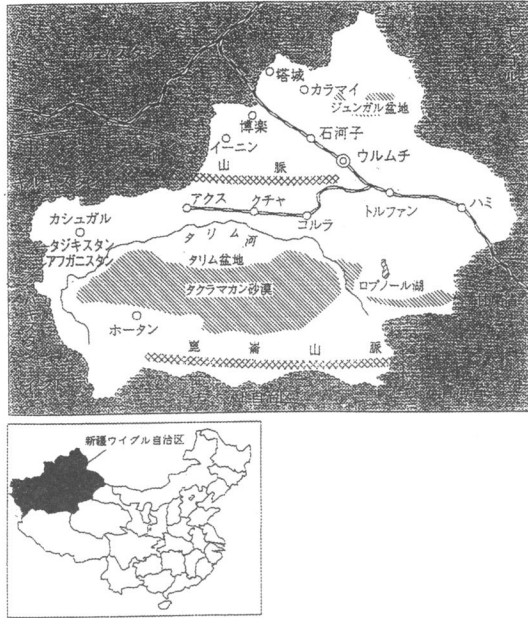


図1 中国研究所編『中国年鑑1999』創土社 p.439

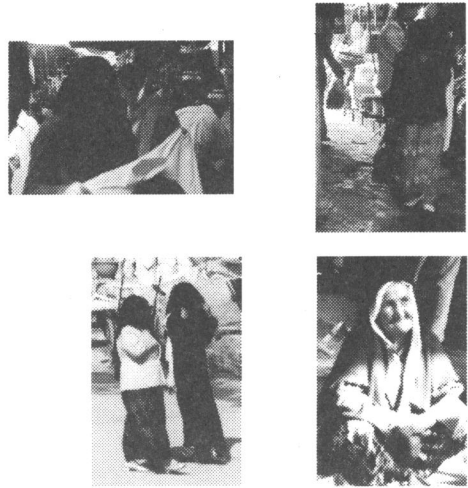
占める割合は12.81%に過ぎないが、今回の調査地である南疆のカシュガルやホータンにおいては、ウイグル族が9割前後を占めており、中国の他地域よりも伝統的なウイグル族の生活が維持されている。

ウイグル族はイスラム教を信じているが、この区における少数民族の多くはイスラム教を信じている。新疆ウイグル自治区は中国の一自治区に含まれると同時に、中央アジアなど「イスラム文化圏」に含まれ、その東端に位置している。イスラム教を信仰している人々はモスリムと呼ばれ、彼らは世界中のさまざまな地域で、その地域に根ざした多様な生活を営んでいるが、その一方で、モスリムという共通性もみられる。

イスラム教においては男女の社会的な違いが強調され、女性は社会的に隔離され、人前ではベールやチャドルにより、顔や身体を隠す。イスラム教における女性のあり方について、とくにこのことが、イスラム教を考え

る上でのシンボリックなテーマとして、世界的な規模で一つの女性問題として論争になっている(マルクス 1995、塩尻 2000、桜井 2001)。

中国においても、イスラム寺院に行き礼拝するのは、男性のみであり、葬式、墓などについては、男が決め男



カシュガルの女性



ホータンの女性

表1 新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の特徴 (2000年)

	人口	ウイグル族	人口にウイグル族が占める割合 (%)	一家庭規模	不就学者が15歳以上人口に占める割合 (%)
全疆	17915459	8256661	46.09	3.68	7.65
ウルムチ市	1643760	210546	12.81	2.87	4.62
カシュガル地区	3365560	3019187	89.71	4.27	9.54
ホータン地区	1664527	1610590	96.76	4.06	12.16

2001年版 新疆統計年鑑(中国統計出版社)より作成

の関与することだと、女たちは墓参りさえもあまり行かない。また、イスラム教では、女性は私的空間である家庭の敷地内で生活すべきだと考えられてきた。女性は公的空間に出ることが禁止され、やむを得ぬ場合、男性と共に外出するか、あるいは、ベールで顔、体を隠し外出する。改革開放以前には、女性がベールをかぶらず外出すると、男になぐられたと聞いた。

中国では開放改革以後、少数民族の優遇政策がとられ、民族の独自の文化を復興・再評価するような動きも認められるようになった。ウイグル族の場合も、伝統的な民族音楽、舞踊を持っている。特に今回の調査地であるカシュガルは民族楽器、絹織物、絨毯、刺繍帽など、伝統的な民族経済により生計を営む人々が多い。が、中国・新疆ウイグル自治区においても、改革・開放以後、伝統的な生活は急激に変化し、生活は多様化しつつある。

2. 研究概要・研究方法

本稿は日本学術振興会の研究助成による「女性と生活環境に関する日中比較研究—中国・新疆ウイグル自治区と日本の実態調査—」（研究代表者 岩崎雅美）のうち、平成13（2001）年度現地調査の一部を報告するものである。

平成13（2001）年度には、日本側の研究者が衣食住及び家族の4領域について調査票を作成し、2001年8月にカシュガル地区で民家訪問し、女性に対して聞き取り調査を実施した。本稿の基礎的な資料は、その調査票である。計20軒訪問したが、一軒の民家を訪問した際、同じ敷地内に三世同居で暮らしている場合には、年長者世代と年少者世代との双方に可能であれば尋ねた。そのため分析に有効な回答者数としては31票が得られた。

回答者の年齢は、最年長者は75歳で、最年少者は23歳までの幅があるが、40歳代が多く、中心は30-50歳代である。日本人研究者は、同様の聞き取り調査を、カシュガルのほかホータンでも実施した。この時の聞き取り調査も参考資料として活用する。

本稿では本調査の家族領域データの一部について分析を試みるものである。

日本においてイスラム教を信じる人々の家族・生活に関する研究は他国については散見される（片倉 1991、片倉編 1994、桜井 2001、原 1986、押川編 1997）。

中国における開放以前のウイグル族の伝統的な結婚や家族に関しては、『中国少数民族の婚姻と家族』（巖汝嫻編 1996）によれば、ウイグル族は父権制家族・親族を特徴とし、離婚・再婚率が高いことや、早婚で多産の傾向があること、開放前には小児婚、売買婚があったことなどが指摘されている。

本稿は、中国・南疆に居住するウイグル族の人々の結

婚・家族に焦点をあて、その人口学的な変遷や、家庭生活、社会関係について、女性たちの生活状況の一端を明らかにするものである。

3. 結婚・家族の人口学的変遷

中国の統計において「家庭」とは、「核家族」のような共同生活を営んでいる最小の範囲を指している。2000年現在の一家家庭規模をみると（〔表1〕参照）、ウルムチ市では2.87人であるが、カシュガル・ホータンでは4人以上となっており、全疆平均の3.68人よりも多い傾向がある。

ウイグル族に対する聞き取り調査では、回答者たちは自分の子どもについては、成人し既婚、他出している場合も同じ家族メンバーであると認識していた。

周知のように、中国では1979年から一人っ子政策が実施されている。中国の婚姻法では、1980年、結婚可能な最低の年齢が、女性は20歳、男性は22歳と定められた。しかし、少数民族の場合は、漢民族よりも2歳若く、女性は18歳、男性は20歳で認められると定められた。少数民族に対する人口政策は、漢民族よりもゆるやかに実施された。しかし、伝統的にウイグル族の女性は早婚や多産などの傾向があり、このような政策に対しては抵抗が



農村の人々（カシュガル）



農家の人々（カシュガル）

表2 対象者の人口学的特徴

	現在の年齢		結婚年齢		子ども数	きょうだい数	
	女性	夫	女性	夫		女性	夫
年 長 者	75	85	40	50	2	2	3
	75	死亡	15	(再婚) 28	12	4	4
	62	73	15	26	6	4	4
	60	78	15	(再々婚) 34	2	1	4
	60	死亡	14	19	3	2	—
	60	死亡	17	—	5	1	—
	59	69	14	24	6	3	1
	56	58	16	18	5	1	9
	55	67	19	31	5	2	3
年 中 者	53	61	22	29	5	7	3
	51	56	16	20	2	3	6
	51	65	24	31	4	4	5
	48	死亡	9	26	6	2	—
	48	50	19	21	5	2	9
	46	50	12	16	5	8	12
	45	50	13	18	8	4	2
	43	45	16	18	1	4	2
	43	46	21	24	4	6	2
	43	45	18	22	4	6	8
	40	42	23	25	3	4	5
	38	52	21	35	4	4	4
	36	42	13	16	4	5	1
年 少 者	36	38	18	20	3	5	4
	33	35	23	25	2	8	4
	32	35	23	26	1	—	—
	30	32	22	24	1	6	4
	29	35	22	28	1	4	6
	29	32	16	19	3	—	4
	26	27	25	26	1	4	8
	23	26	18	21	1	6	1
23	26	19	23	1	4	4	

強くあったという。そのため一人っ子政策の普及は遅れたが、1980年代の後半から実施されるようになり、最近では中国の一自治区として、中国の諸政策の影響を受け、変化してきているという。

〔表2〕は、対象者について、夫婦の現在の年齢や、結婚年齢、子ども数や、自分たちのきょうだい数について、まとめたものである。

対象者を便宜的に、55歳以上を「年長者グループ」、35歳以上55歳未満を「年中者グループ」、35歳未満を「年少者グループ」という3グループに分類して検討する。

(1) 年長者グループ

55歳以上の対象者は9人、そのうち、夫が死亡した人は、60歳以上に3人ある。

結婚年齢についてみると、女性は14-15歳頃が多く、早婚である。男性の方は10歳代後半から30歳過ぎまで幅があり、かなりばらついている。男性が28歳や34歳で再婚した場合、結婚相手の女性は10歳から20歳近く年下の15歳女性を選んでいいる。

夫婦の年齢差についてみると、夫は10歳以上も年上の人が多い。

夫婦間の年齢差が一般的に大きいのは、伝統的なイスラム教の結婚観によるためであろう。すなわち、男性は結婚するには女性側に婚資を送らねばならないし、また結婚後、妻子に対する経済的な扶養義務がある。そのため、経済力・生活力がなければ結婚できないのである。それに対して、女性には結婚後、家事責任を負い子どもを産み育てる義務があり、初潮前後の早婚が奨励されてきたという(片倉 1991、マルクス 1995、柳橋 2001)。

この世代の夫婦の子ども数についてみると、平均的には約5-6人である。

彼ら自身のきょうだい数は平均約3-4人で、一人っ子の人もあれば、例外的に9人という人もある。

(2) 年中者グループ

35-54歳の対象者は14人である。

結婚年齢についてみると、女性は12-13歳頃に結婚したというかなり早婚女性もあるが、10歳代前半から20歳代前半までの幅がある。他方、男性の方は20歳代に結婚する人が多い。が、最年少は16歳で10歳代後半が4人いる一方で最年長は35歳であり、男性の結婚年齢にはかなり巾がある。

夫婦間の年齢差についてみると、51歳の女性が65歳の夫、また、38歳の女性が52歳の夫という夫婦の年齢が10歳以上離れた組み合わせもあるが、その他の夫婦は、夫は妻より2-3歳年上が多く、夫婦の年齢差は年長者より全体的に小さい。

子ども数は、1-2人から8人までさまざまであるが、4-5人というが多い。子どもが8人いるという女性は、調査時には、45歳であったが、13歳の時、18歳の夫と結婚している。

(3) 年少者グループ

23歳から34歳までの女性は8人である。

結婚年齢についてみると、女性は22-23歳、男性は25歳前後が多い。29歳女性が16歳の時、19歳の男性と結婚したという一例を除き、他は中国のいわゆる一人っ子政策通りに、女性は18歳以上で、男性は20歳以上で結婚している。

夫婦の年齢差は、1歳から2-3歳に集中しており、1人のみ6歳差である。

子ども数は、1人が大半である。

この世代のきょうだい数は、4人から8人ぐらいまで、かなり多い。離婚し子連れで親元に戻り生活しているなどの記載もある。

(4) まとめ

結婚年齢についてみると、女性は10歳代前半に結婚するという早婚の傾向があったが、最近では20歳前後が多くなってきている。男性の結婚年齢は、10歳代から30歳代までかなり年齢に巾があったが、最近では20歳代、特に20歳代半ばが多くなっている。

夫婦の年齢差についてみると、伝統的な結婚では10-20歳も開きがあり、夫が妻よりもかなり年上の傾向があったが、最近では約2-3歳に差が縮小している。

私たちが訪問したカシュガル家庭では、妻は37歳、その夫は再婚で60歳という、親子ぐらい年齢の離れた夫

婦があった。また、ホータンの農村で訪問した35歳女性は、離婚後6年前に再婚したと話していた。民家訪問の際、このように離死別・再婚などについて聞くことがあり、離婚、再婚、継親子関係などは、かなりあるように推測された。

4. 家族・親族及び社会関係

(1) 家族・親族関係

イスラムの家族法では、夫は「アッラー」のような存在で、男性は家長として命令し、妻は服従しなければならないとされる。離婚は夫方から言い出されることが多いので、妻は夫の態度などを気にして過ごさねばならないとのことである。

伝統的な結婚では、男性は何人もきょうだいがある場合も、すべての男の子は平等に扱われ結婚後も親元に留まることが期待されている。それゆえ男の子は、結婚後も親と同居するか親たちの家の敷地内に別居し共同生活を営んでいることが多い。女性の方は結婚後、男性側の親族の方に空間的には移動して、夫の親族と共同生活することになる。結婚相手は親類縁者や、隣近所・日常生活圏の範囲で、親が一方的に決める傾向があるが、本人同士が以前から顔を見知っているような相手とが多い。そのため、女性たちは自分の生まれ育った地域で結婚し、結婚後も親の近くに住んでいる人が多いのである。

女性たちは結婚後、夫方の親族と同居し相手方の親族組織に含まれるようになって、自分の親の家には度々、帰るなど、日常的に頻繁な交流をし、親密な関係を持ち続ける。男女とも一生涯、自分の親や家族・親族を大切にしているのは、「自分はお父さんとお母さんの子どもです」という事実は、結婚の有無に関わらず不変のことだからと話す。

ウイグル族の人々は、いわゆる「～家」というようなファミリー・ネームを持たない。通常、個人の正式な名前を表す際には、自分の名前の後、父親の名前が並べられる。さらに祖父の名前がその後に並べられることもある。親族について尋ねた場合も、父方親族を中心にして親族関係が意識されている。

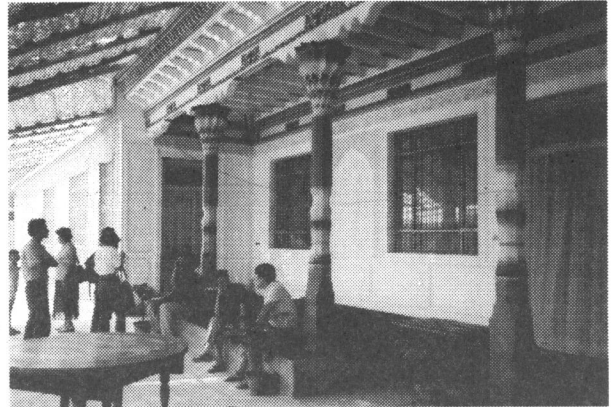
ファミリー・ネームを持たない彼らの名前は、結婚の有無にかかわらず一生涯、変わらない。これはイスラム教圏では共通する特徴である。

(2) 女性の社会関係

女性の日常生活の大半は、家の中で過ごされてきた。その家はレンガや土などの厚い塀で囲まれ、路地側に窓はほとんどない。が、玄関を空けて中に入ると、緑の豊かな空間が広がっており、その周囲に住居があり、内側に大きな窓や縁台がついている。そして、室内は絨毯や



塀と路地 (カシュガル)



民家の縁台 (カシュガル)



民家の中庭にて (カシュガル)



中庭からみた民家 (カシュガル)

飾り棚でとてもカラフルに飾られている。

ウイグル族の日常生活はかなり明確な男女分業型である。家事について、男は買い物ぐらいしかしないという回答が多い。買い物は公的空間に出かけることを意味するため、伝統的に男の仕事と考えられてきた。

・社会的タブー

男女別にタブーとされていることを尋ねたところ、男女とも浮気・不倫などを多く挙げ、夫婦ともに貞節が重要であると指摘していた。特に女性は夫以外の男性との接触を避けること、これには男性と握手すること、黙って派手な格好で外出すること、夫に不愉快に思われることは避けることなど、他男性との関係を強くコントロールして生活していることが伺えた。それは「夫婦仲や家庭を壊したくない」、「家庭に悪影響がある」からだという。

その他、女性は人前で手や足を出してはいけないことを指摘していた。女性たちは眉や伸ばした髪的美しさを自慢し、日常的な服装はとても華麗で派手である。子どもの頃から、女の子は耳にピアスをつけるほか、ネックレスなど装飾品を身につけている。

家庭内では華やかに着飾っている女性たちも、外出する場合には、足や肌を隠すほか、髪、顔なども隠すこと

が多い。女性たちはパズールなどへ自由に外出しているようにみえるが、女一人での外出は、個人差があるものの控えがちのようである。外出時にはベールをかぶっている女性が多くみられる。女性たちは自分の親族の家をよく訪問するが、これは堂々と外出できる理由・口実であるようにも思われた。

・女性であることの自己評価

女性に生まれてよかったかを尋ねたところ、回答者20人のうち、「どちらともいえない」7人、「いいえ」2人であった。半数近くは自分が女性で生まれたことを肯定できていない。これは多い数字ではなかろうか。

その理由については、女性の方が、家庭のしつけが厳しく品行方正な人になるように期待されていること、また、家事は女性の義務、女性がするのは当たり前のこととみなされているが、かなり忙しく負担が重いことが指摘されていた。「はい」と答えた人の中にも、「娘から男女平等だと聞いたから」だとか、「女の幹部として他人に役立つので十分満足」だと、答えている人がある。近年、女性の日常生活も社会参加するなど変化をしてきているゆえであろう。これは中国における少数民族の優遇政策や男女平等政策などによるところが大きい。



料理をつくる姉妹（カシュガル）



子育て中の母親（ホータン）

5. 子ども及び教育について

・子どもの性別

現代中国においては、人々はどちらかといえば男子の誕生を望むため、人口の性比は男性が女性より多くなっていることが問題にされている。

伝統的なムスリム社会は父系制社会であるため、建前としては男児が望まれてきた。しかし、家庭においては、母親と娘との関係の親密さゆえ、また、女の子は家事をしてくれるため、娘を持つことは幸せなことで、そして、不可欠なことだと考えられてきた。

子ども数や性別について希望を聞くと、すべての人が「子どもは神からの授かりものだから、子どもの性別を問わずできるだけ欲しい」とか、「女の子は家事を手伝ってくれるから欲しい」など、特に男の子にこだわっている風ではない。ウイグル族の間では伝統的に子どもの誕生は、健康に生まれてくれば男女を問わず喜ばれてきた。しかし、漢民族の男児選好の考え方が最近ではウイグル族にも影響してきており、ウイグル族の間にも男子を望む風潮が生まれつつあるとのことである。

・教育程度

現在、中国では中学校まで義務教育である。9年間の義務教育制度が導入されたのは1986年のことであるが、新疆ウイグル自治区では1988年に実施された。しかし、義務教育制度が実施されても、農村部の伝統的な生活をしている人々には、自分たちに教育が必要であるということが理解できない人が多い状況であったという（アブリミティ 1999）。

1999年現在、15歳以上の人口に不就学者の占める割合は、全疆で7.65%であるが、カシュガル地区では9.54%、

表3 教育程度（性別・年齢）

		人 (%)							
性別	年齢	小学校	中学校	高等学校	専門学校	大学	その他	不就学	計
女性	55歳以上	4	1	0	1	0	0	2	8
	35—54歳	5	8	3	2	0	1	0	19
	35歳未満	5	14	4	2	2	0	0	27
	小計	14	23	7	9	2	1	2	54
	(%)	(25.9)	(42.6)	(13.0)	(9.3)	(3.7)	(1.9)	(3.7)	(100.0)
男性	55歳以上	2	3	0	0	1	0	3	9
	35—54歳	3	7	2	2	0	0	0	14
	35歳未満	6	6	2	5	1	1	0	21
	小計	11	16	4	7	2	1	3	44
	(%)	(25.0)	(36.4)	(9.1)	(15.9)	(4.5)	(2.3)	(6.8)	(100.0)
合計		25	39	11	16	4	2	5	98
(%)		(25.5)	(39.8)	(11.2)	(16.3)	(4.1)	(2.0)	(5.1)	(100.0)

表4 子どもに望む将来の教育程度

(N=20)

男の子	女の子	計
大学	大学	12
大学	—	1
—	大学	1
専門学校	大学	1
高校	大学	1
中学	高校(・大学)	2
中学	中学	1
中学	字が読める程度	1

ホータン地区では12.16%である(表1参照)。

調査回答者たち自身の教育程度や、子どもたちへの将来の教育レベルについての希望などを、検討してみる。

〔表3〕は、教育程度について、調査回答者のみでなく、子どもたち世代についても、15歳以上で学歴について記載されているものを、性別・年齢別に注目した表である。

全体的にみると、小・中学校レベルが過半数を占め、大学卒は4人(4.1%)に過ぎない。性別に着目すると男女差はあまりないが、男性は女性より専門学校が多い。

年齢別にみると、男女とも55歳以上では文字を読み書きできない人が5人いる。他は男女とも小学校程度が大半で、男性に中学校がある。35-54歳では、中学校が、男女とも約半数であるが、かなり多様である。35歳未満では女性は中学校が約半数、男性はばらついているが、女子と比較し専門学校が多い。

各家庭について検討してみたが、家庭内での子どもの教育程度はばらついており、特に教育熱心な家庭かどうかの分類はできない。性別に着目すると、一家庭内に子どもが複数いる場合、男子は皆が小学校卒業であるのに、女性の方は高校・大学を卒業しているなど、一家庭内に、男子よりも女子の学歴が高い傾向のある家庭が何軒かある。

・子どもに望む教育程度

この点に関連し、〔表4〕は、調査対象者に、子どもに望む将来の教育程度について尋ねたものである。

20人のうち12人(6割)は男女とも大学まで、どちらかの性については無回答であったものも加えると、実に7割は大学程度の教育を望むと答えている。他についてみると、4人(2割)は男子より女子に高い教育を期待

している。男女とも中学校程度は1人、男子は中学で女子は字が読める程度が1人、男女とも中学校レベル、あるいはそれ以下しか期待していないのは、わずか2人(1割)にすぎない。全体的にみると、女子には7-8割、男子には6-7割まで、大学進学を望んでいる。

私たちの聞き取り調査で子どもの教育や将来について尋ねると、女の子は、親子ともに将来は医者か教師にという答えが多かった。教育を受ければ、女の子の場合少数民族や最近の優遇政策により、就職のチャンスがあるといった事情が女性の高学歴化に拍車をかけている。たとえば、新疆では幼稚園、小学校には女性の先生が多く、中学校でも60%、高校40%ぐらいは女性の先生だと聞いた。

以上のように、公教育は男女共学になっているが、家庭においては、男の子は父親が、女の子は母親が責任を持って育てるという伝統が続いている。放課後や日曜日、また、夏休み、冬休みなどのまとまった休みの時期には、男女で過ごし方が相違する。

伝統的な民族経済圏では、結婚して一人前と考えられる。男の子は将来のためには手に職をつける、つまり、伝統的な技術を身に付けるのが、生活のため重要だという考え方が根強い。この地域では、男の子はよほど優秀でなければ教育を受けても就職のチャンスがない。絨毯や絹織物、民族楽器などが盛んな土地柄のため、私たちが訪問した、いずれの場所においても、男子が手伝いや見習い・修業をして手に職をつけようとしていた。一方、女の子は家事の手伝いや子守りなどをして過ごすことが多い。

優秀な子どもには、男女を問わずできるだけ教育を受

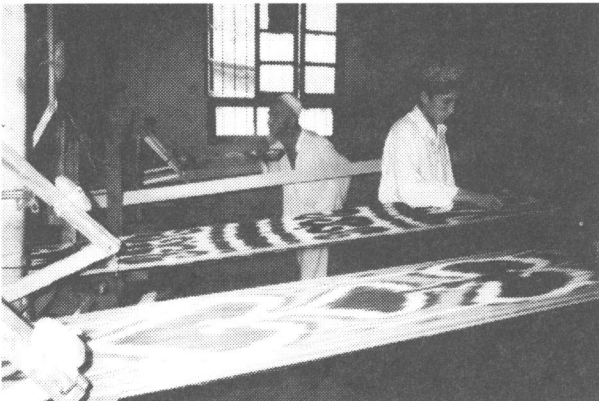


子守りをする少女(カシュガル)

けさせ、近代的な職業を目指すという傾向も生まれている。現在、新疆ウイグル自治区において、義務教育の段階では、漢語・漢民族の教育か民族教育かのどちらを受けるかを選択できる。進学や就職には漢語・漢民族の教育を受ける方が有利になるため、1990年代からは、漢語・漢民族の教育を受ける人が徐々に増加してきている。そこで、少数民族の人々が、自民族の教育ではなく、漢民族と同じ教育を受けた場合、現地では「57民族」と呼ばれている。



母親の手伝い（ホータン）



絹織物の工場（ホータン）



民族楽器づくり（カシュガル）

おわりに

中国の新疆ウイグル自治区のうちでも、特に南疆のイスラム教を信じるウイグル族の人々の生活について、フィールド調査に基づき分析してきた。この地域は、中国において辺境とされているのみでなく、この自治区内においてさえも産業・経済も遅れた貧しい地域とみなされている。しかし、改革開放以後、「民族の独自性」「民族の誇り」を強調する動きがある一方で、伝統的なムスリムの生活は急激に中国への同化政策が進み、あるいは、両者は対立拮抗する状況にもなっている。

中国で少数民族や女性に対する優遇政策がなされてきた。このことは、今回対象としたウイグル族の女性たちに影響を及ぼしている。イスラム教的な女性の生き方には女性を社会的に隔離し、女性に職業・教育を禁止するなど女性差別的な社会生活を強いてきた一面があるのは事実である。それゆえ、中国の女性優遇政策は、女性たちには以前よりも外に自由に出られ教育を受けて医者・教師などの近代的な職業につくチャンスが生まれるなど、プラスに感じられているように思われる。しかし、グローバル化が進展すると、世界的に人々の生活は画一化していく面は否定できない。

近年の世界的に民族的な独立の動きがあるなかで、中国においてもイスラム教を信じる人々の間では独立を求める動きも起こっており、今後の行方は微妙である。

本研究は日本学術振興会の研究助成による「女性と生活環境に関する日中比較研究—中国・新疆ウイグル自治区と日本の実態調査—」（研究代表者 岩崎雅美）の一部である。本研究の概要及び初年度の現地調査については、岩崎他（2001）を参照のこと。

引用・参考文献

- 岩崎雅美・宮坂靖子 2000 「中国・新疆ウイグル自治区の女性と生活—その1 新疆大学の概要及び少数民族の生活—」 『家政学研究』第47巻1号 pp.58-61
- 岩崎雅美・勝田啓子・久保博子・瀬渡章子・中田理恵子・服部範子・宮坂靖子・村田仁代 2001 「中国・新疆ウイグル自治区の女性と生活—その3 平成12(2000)年度少数民族に関する生活調査—」 『家政学研究』第48巻1号 pp.57-76
- 岩崎雅美・村田仁代 2002 「中国・新疆ウイグル族の女性服飾—2001年度 カシュガル及びホータン地区における調査より—」 『家政学研究』第49巻1号 pp.69-74
- リズワン・アプリミティ 1999 「模索するウイグル人—新疆における民族教育の状況—」 『アジア遊学』No.1 特集 越境する新疆・ウイグル pp.164-184

- 張承志 1993 『回教から見た中国—民族・宗教・国家—』 中公新書
- 巖波潤編 江守五夫監訳 1996 『中国少数民族の婚姻と家族』中巻 第一書房 ウイグル(維吾尔)族 pp.93-104
- 原忠彦 1986 「東ベンガル地方のイスラム教徒の生活」 原ひろ子編 『家族の文化誌—さまざまなカタチと変化—』 弘文堂 pp.51-78
- 片倉もところ 1991 『イスラームの日常世界』 岩波新書
- 片倉もところ編 1994 『イスラーム教徒の社会と生活』(講座イスラーム世界 1) 悠思社
- キング・マルクス 桜井啓子訳 1995 「イスラームと女性」 竹下政孝編 『イスラームの思考回路』(講座イスラーム世界 4) 悠思社 pp.309-364
- 宮坂靖子・岩崎雅美 2000 「中国・新疆ウイグル自治区の女性と生活—その2 少数民族における教育と家族—」 『家政学研究』第47巻1号 pp.62-67
- 押川文子編 1997 『南アジアの社会変容と女性』 アジア経済研究所
- 桜井啓子 2001 『現代イラン—神の国の変貌—』 岩波新書
- 瀬渡章子・久保博子 2002 「中国・新疆ウイグル自治区の住居と住生活—2001年度 カシュガル地区における調査より—」 『家政学研究』第49巻1号 pp.75-82
- 塩尻和子 2000 「イスラーム世界の女性—コーランの理想と現実のはざままで—」 『世界』第679号 2000.9月号 岩波書店 pp.100-105
- 新免康 2002 「新疆ウイグルと中国の将来」 板垣雄三編 『「対テロ戦争」とイスラーム世界』 岩波書店 pp.184-194
- 田村慶子・篠崎正美編 1999 『アジアの社会変動とジェンダー』 明石書店
- 山田信夫 1985 『草原とオアシス』(世界の歴史 第10巻) 講談社
- 柳橋博之 2001 『イスラーム家族法—婚姻・親子・親族—』 創文社
- 若林敬子 1994 『中国 人口超大国のゆくえ』 岩波新書
- 若林敬子 1996 『現代中国の人口問題と社会変動』 新曜社 pp.292-305